

# 大阪中学選手権(7/25・26 万博)RESULTS

## <男子の部>

100m 岩下 12:22 (-2.1)

200m 白石輝 24:16 (+0.6) <準決勝> 24:20 (+1.6)

低学年4×100mR (大井・塩見・森田・伊藤) 49:44

<準決勝> (大井・塩見・森田・伊藤) 48:94

<決勝> (大井・塩見・森田・伊藤) 48:72 4位

共通4×100mR (西田・岩下・木下岬・白石) 46:22

<準決勝> (西田・岩下・木下岬・白石) 45:82

走り高跳び 奥村尚 1m65 <決勝> 1m65

走り幅跳び 村北 5m61 (-0.7)

三段跳び 榎本 11m79 (+1.0) <決勝> 11m71 (+1.9)

植田涼 11m13 (-1.3)

円盤投げ 東山 30m50 <決勝> 29m05

四種競技 神原 2019点 7位

110mYH 17:56 (-0.4) 567点 砲丸投 9m54 458点

走高跳 1m65 504点 400m 57:84 490点

川城 1539点

110mYH 19:92 (-1.6) 356点 砲丸投 9m32 445点

走高跳 1m50 389点 400m 61:97 349点

## <女子の部>

100m 山本祐 DNS 畑中 13:31 (-0.1)

<準決勝>畑中 13:09 (+1.4)

200m 山元 28:24 (-0.9)

800m 梶山 2:30:34

1500m 木下茜 5:01:98 高橋 5:05:31

100mJH 村上瑞 14:67 (+1.1) <準決勝>14:69 (+1.6)

<決勝>14:64 (+1.0) 4位

低学年4×100mR (緒方・畑田・西川・平岡) 54:11

<準決勝> (緒方・畑田・西川・平岡) 53:97

共通4×100mR (谷田・山本祐・山元・村上瑞) 51:02

<準決勝> (山本光・山本祐・山元・村上瑞) 50:46

<決勝> (山本光・山本祐・山元・村上瑞) 49:67 6位

走り高跳び 岡本 1m48 <決勝> 1m45

円盤投げ 中村百 25m66 <決勝> 26m77 7位

四種競技 加藤 1782点

100mJH 17:46 (+1.0) 546点 走高跳 1m30 409点

砲丸投 7m46 365点 200m 30:29 (+1.2) 462点

## 大阪中学選手権を振り返って

○ 蒸し暑い雨天練習場にリレーメンバーが集まった。複雑な表情を浮かべる4人の選手に「決勝レースどうする？」と、声をかけた。正直、決勝レースを棄権するのも選択肢のうちの一つであると覚悟していたのだ。最後に「私は走ります」ときっぱりとエースの第2走者山本祐莉が答えて、ミーティングは終了した。

夢にまっ正直に今日この日までがんばってきた。夢は3連覇。東雲共通女子リレーチームが3年連続5度目の選手権優勝を果たし、今年も全国の夢舞台で勝負するというドでかい夢があったのだ。春先から昨年の低学年女子リレーの近畿チャンピオンである西陵中が好調で優勝候補筆頭であることは間違いなかった。2週間前の通信大会決勝でも西陵が48秒99の記録で優勝、東雲は今シーズンのチーム新記録の49秒73で走るものの3位で完敗している。それでも夢を一点の曇りもなく信じていたのだ。大会5日前。突然、祐莉が右足の甲が痛いと言い出した。10日前から極端に練習量を落として調整してきたので、そのときはすぐ治るだろうと思っていた。ところが、次の日になっても歩いていても足をかばう動きになっていたのだ。病院に行ってレントゲンを撮りに行った。診断は骨膜炎。疲労骨折の手前であるらしい。そのあと、すぐに国体の大阪選手団のトレーナーである凜ぐの小西トレーナーのところへ行かせて治療に専念させた。不安がないと言えば、嘘になる。それでも、2日目の個人種目の100mが棄権してでもいいから、初日のリレーの予選、準決、決勝の3本を走って夢をかたちにするのだという祐莉の決意はまったく揺るがなかったのだ。

大会当日。朝から本部席横の公式ブースでトレーナーをしている小西さんのところへ行かせてテーピング。痛み止めを飲みながら、予選のレースにのぞんだ。予選の第1走者は谷田。準決からは1年生の祐莉の妹、山本光菜里を起用することがすでにミーティングで確認済みであった。1年生の光菜里の負担を少しでも軽くしたいことと、祐莉が予選で足を引きずるようであれば、温存していた光菜里を低学年リレーの準決勝から起用しようという策略も密かにあったのだ。光菜里を起用すれば、低学年リレーで3位以内に入って近畿大会出場の可能性が大きくなることも計算済みであった。予選ははっきり言って、4人とも体が動いていなかった。祐莉もいつものキレがなく、51秒02の平凡な記録に終わった。そして、準決勝。このレースでもいつもの祐莉ではなかった。普段は面白いようにバックストレート



で前を行く走者を追い抜いていくはずの祐莉が、逆に追い抜かれてしまう始末。準決勝1組で豊中11中と同着で4位。プラスでぎりぎり拾われて何とか決勝進出が決まって先のミーティングとなったのだ。

17時50分。大会初日のファイナル種目。共通女子4×100mリレー決勝。1レーンに東雲。シードレーンから外れて、カーブが一番きつくて不利とされる1レーンであっても、夢をあきらめない彼女たちは堂々としていた。東雲のブルーのセパレートユニフォームが、リレーの伝統を守り続けているのかも知れない。彼女たちはシミュレーションど



おりに見事なルーティンを繰り返していた。やがて競技場に静寂が訪れて運命の号砲が鳴った。スタンドからは「夢輝け！東雲中学！東雲ブルーの超特急!!行け行けー！」の大声援。大きな夢に向かって、8チーム計32名の継走が始まったのだ。バトンがつながる度に、夢がさらにふくらんでいく。胸がはりさけそうになりながら、やがてアンカーへ。西陵が圧倒的な強さを見せて独走。48秒19の大阪中学新記録。沸き返る西陵チーム。昨年、東雲がこの大会の決勝レースで出した48秒28の記録がわずか1年で更新されたことになる。東雲のアンカーの村上もなだれこむようにゴールしたが、近畿大会出場の3位以内の圏外であったことがすぐにわかった。完敗であった。

電光掲示板に決勝の正式結果が表示された。思わず息を呑んだ。東雲は6位。記録は49秒67の今シーズンのチーム新記録。優勝した西陵が、おそらく今シーズン日本ランキングトップの48秒19。6位の東雲までが49秒台。49秒6台の記録を持つ河南が無念の失格になってこの結果である。2011年の奈良全中の決勝の優勝記録が48秒97。そして49秒台が6チーム。全国大会の決勝レースよりもレベルの高い勝負が、今、目の前で繰り広げられたことになるのだ。

バックストレートで泣きじゃくる彼女たちのところへ駆け寄った。無性に感動したのだ。「立派だったよ。よく戦った。祐莉がこの状態で、まさかこんな記録で走れるなんて……。」彼女たちは泣き止まない。完璧な状態で決戦の日を迎えることができなかったのは間違いなく指導者の責任である。それでも、手負いの祐莉であっても祐莉は最善を尽くしたし、残りの3人は土壇場で今シーズン最高の走りを見せたからこそ、49秒67の立派な記録を残すことができたのだ。大粒の涙を流す4人の選手を見つめながら、中学陸上の素晴らしさを噛みしめた。



○ 男女低学年、共通リレーの4種別で大阪大会の決勝に

残ることも今大会の目標のうちのひとつであった。男子共通リレーは先の通信大会で出した45秒20がベストで、今大会は44秒台で決勝進出してひとつでも上の順位を狙う目算であったが、これまた2走のエース岩下が終業式の日に関段で足をくじき、この時点で目算が狂ってしまった。返すがえすも、自分の指導の甘さを恥じた。女子低学年リレーは5月の時点で53秒台の記録を持っていたので、決勝どころか近畿大会出場に一番近い種目であった。それでも共通リレー重視の観点で、2走の1年生エース山本光菜里を共通リレーに起用したことで決勝進出がきびしくなった。その状況下で、新しく2走に抜擢された1年生の畑田がそれでもよく走り、チームワーク良く53秒97の記録で準決勝を走り抜いた。何と100分の4秒差の9番目の記録で決勝進出を逃すことになったのだが、彼女らのあきらめない心の強さと健闘を讃えたい。



男子低学年リレーチーム。4人の選手以上に密かに近畿大会出場の可能性があると感じていた。ひとりひとりの選手は、はっきり言って際立った力はない。2年生の2人は100m12秒7台の選手。1年生の2人も13秒5前後の選手である。いつも言っているように「バトンの魔力」を発揮して総合力で勝負できるはずだと思い選手にもその可能性を口酸っぱく繰り返していた。準決勝は2組あって各組3着とそれ以外の記録上位2チームが決勝に進出できる。東雲は2組。番組編成を見て、すぐにきびしい組であることがわかった。準決勝2組。ピストルの閃光とともに第1走者の大井が勢い良くスタートした。2走の塩見、3走の森田、そしてアンカーの伊藤へと東雲は比較的スムーズなバトンワークを見せた。ほとんどノーミスである。ホームストレートに入って東雲は5番手前後。枚方二が先頭で47秒42でフィニッシュ。そのあと、養精48秒54、わずか100分の1秒差で杉が48秒55。ここまでが3着。電光掲示で正式リザルトを確認すると、茨木西が48秒61で4着、そして東雲が48秒94で5着。同じ組で走った格上の咲くやこの花がバトンミスで失格したことで、ラッキーにも2組の4着、5着の茨木西、東雲がプラス2チームで拾われて決勝進出を果たすことになったのだ。



大会2日目のファイナル種目。残すところ、男子低学年リレーと男子共通リレーの決勝のみとなった。1レーンに東雲。春の三島地区予選会では7位であったチームが、この大阪大会の決勝の舞台に立っているのだ。しかもこの決勝に天王、養精、茨木西、片山と併せて三島地区の学校が5チームも残っている。スターターのピストルが鳴った。

第1走者の大井が好ダッシュを見せた。それでも優位な順位ではない。バトンは第2走者の1年生塩見へ。各校の1年生エースが揃うこの区間を何とかしのいで走りたい。粘りの走りで第3走者の1年生森田へバトンが渡る。混戦である。第3走者の森田も必死で前を追う。バトンは第4走者の2年生伊藤へ。第4コーナーのテークオーバーゾーンを真っ先に飛び出したのが枚方二、やや遅れて河原城、伊藤が次に飛び出したが、杉、茨木西と混戦である。あっという間に各チームのアンカー走者がホームストレートを駆け抜ける。枚方二が真っ先にフィニッシュ、2位に河原城。ここまでは確認できた。杉、茨木西、東雲がほぼ横1線。電光掲示板に正式結果が発表された。思わず声をあげてしまった。4位に東雲。何と3位の茨木西とは100分の2秒の僅差で近畿大会出場を逃したのである。地区大会でまったく歯が立たなかった天王はバントラブルで54秒34の7位、養精もオーバーゾーンで失格というアクシデントが東雲に味方して、準決勝に引き続きチーム新記録を連発、48秒72で4位入賞を決めたのである。4人が複雑な表情で集まって来た。「どや、悔しいやろ！この悔しさを噛みしめて、近畿や全国へ行けるようなチームを男子も作ろうや!!」と声をかけた。静かに、そして決意の表情で4人が頷いた。

- 先の通信大会ですでに全国大会参加標準記録（14秒85）を突破して全国大会出場を決めている村上瑞季にとって、正念場となる大会2日目となった。14秒62の記録を持つ村上であるが、3位以内に入って近畿大会出場という道のりは決して平坦ではない。今年の大阪の女子ハードルのレベルは全国的に見ても一番高い。昨年度ジュニアオリンピック B クラス（2年生）優勝の豊中十四の中司菜月選手を筆頭に全国大会出場を決めた選手が9人もいる。これはきわめて異常な事態で、全国大会に行くことより、大阪大会の決勝に残ることの方が難しいことになる。さらに3位以内の近畿大会出場を決めるには14秒3台の記録が必要になることが予想された。14秒3台というのはそもそも全国大会の入賞レベルであり、ジュニアオリンピックの A クラス（3年生）の参加標準記録に相当する。昨年まで大阪大会の決勝に残ったことがない村上が、ここまで急成長を見せたことは特筆ものであるが、だからこそ全国大会に出る前に近畿大会で強豪選手と競り合うことには大きな意味があるのだ。予選を14秒67でその組の1着。順調に準決勝に駒を進めた。準決勝は3組。各組2着までと3着以降の記録上位者2名が



決勝進出となる。村上は3組3レーン。隣の4組は西陵の天野選手。14秒3台の記録を持つ。ピストルのスターターに村上は素早く反応して、得意のアプローチで好スタートを切った。5台目までは完全にトップ。そこから4レーンの天野選手が追い上げてくる。10台目のハードルをわずかに先に越えた天野選手が1着14秒54、2着に村上が入り1

4秒69。追い風1.6m。着取りで決勝進出を決めたものの、村上の準決勝のタイムは決勝進出者8人の中で7番目。決して予断を許さない状況である。

14時30分。共通女子100mJH 決勝の時を迎えた。第2コーナーに勢揃いした8人のファイナリストを、灼熱の太陽が容赦なく照らしつける。準決勝から追い風になるようにバックストレートでのレースとなっていた。ゴール付近にはメインスタンドから移動してきた東雲応援団が陣取っている。村上は7レーン。優勝候補筆頭の中司選手が隣の6レーン。持ちタイム14秒3台の記録を持つ茨木西の中村選手が3レーン、西陵の天野選手が4レーンである。あとは、持ちタイム的に言っても混戦模様となる。スターターのピストルで勢い良く飛び出した8人がスタートから13mちょうどに置かれた第1ハードルをきれいに越えていく。リード足が素早く地面をとらえてまた次々と高さ76.2cmのハードルを越えていく。6台目あたりから中司選手、中村選手、天野選手の3人が前に出る。村上はハードル間の8mのインターバルの走りで正確にピッチを刻み続ける。中司選手が真っ先にフィニッシュラインを駆け抜ける。そして、中村選手、天野選手。村上は4着。村上が顔を覆う。この日は100m欠場となった山本祐莉が、涙が止まらない村上のところに駆け寄った。電光掲示板に正式結果が発表された。1位中司選手14秒16。2位中村選手14秒31、3位に天野選手で14秒37、そして4位に村上14秒64。大阪の決勝の上位4人の内、3人が茨木市の選手！ファイナリスト8人の内、三島地区の選手が5人!! この数字にあきれかえってしまったが、村上が自分の力を存分に発揮して戦い切ったことには間違いない。さらに上を目指して、明日からの練習に全力で取り組んでいくことでしか道は拓けない。レース後に村上にそのことを伝え、口を真一文字にして決意の表情を見せた。

- 女子円盤投げの中村百江が予選で自己ベストの25m77。決勝ではさらにその記録を26m77まで伸ばして見事に7位入賞を決めた。昨年この種目で当時3年生の佐々木麻衣が26m88を投げて8位入賞しているので、東雲2年連続の入賞を決めたことになる。長身で手が長い佐々木のように、決して体格的に恵まれた選手ではない。今大会でも予選の最後の3投目に予選通過記録(25m00)を上回る25m66を投げ、決勝ラウンドでも、2投目の26m17の記録でぎりぎりベスト8。最後の6投目で26m77を投げて7位入賞を果たすなど、彼女の粘り強さの真骨頂を発揮した。これらもすべて彼女が毎日粘り強く円盤を投げ続けたことの成果である。

通信大会から2大会連続入賞の7位となった神原祐樹も同じ。実は最初のハードルのアプローチに失敗して苦しいスタートとなっていた。16秒1台のベスト記録を持つ彼が17秒56もかかってしまったのだ。それでも集中力を切



らさず、次の砲丸投げでは通信大会よりも50cm記録を伸ばしている。走り高跳びも自己タイの1m65。そして最後の400mもセカンド記録の57秒84にまとめたのだ。決してあきらめないその戦いぶりは立派である。

フィールド種目で決勝ラウンドに駒をすすめたものの、ベスト8に入れなかった選手がいる。走り高跳びの奥村、岡本、三段跳びの榎本、円盤投げの東山である。東山は決勝のコール時間を間違えて、慌てて決勝にのぞんで9位。まったく力を出し切れずに終わった。大会前に配布された競技ダイヤをしっかりと確認しなかったという根本的なミス。準備力がまったく備わっていなかったと猛省すべし。跳躍の3人は心して、決勝ラウンドに進んだはずだ。ところが、予選ラウンドの記録を上回ることができなかった。何が足りないのか？個々に課題はさまざまであるが、それぞれがまず自分でじっくりと考える必要がある。

最後に炎天下の中、競技の準備や片付け、清掃、そして補助員の仕事にがんばってくれた多くの部員のがんばりを讃えたい。集団応援もご苦労様でした。3年生がよく引っ張ってくれました。ありがとう。

